

## 女優一人芝居×ダブルキャスト 障子の国のティンカーベル TINKERBELL IN SHOJI LAND

### 若き野田秀樹が書いた 幻の一人芝居が、今、新たに甦る!

妖精ティンカーベルが、世界を巡って物語るピーターとの“人でなし”の恋物語。野田秀樹とゆかりの深い演出家・俳優マルチェロ・マーニが演出し、実力派・異世代女優、穂谷友子・奥村佳恵が演じ切る。2バージョンでの連続上演!



左から)奥村佳恵、マルチェロ・マーニ(演出)、穂谷友子

本企画は、次々と傑作を世に送り出す野田秀樹の脚本を、野田秀樹以外の演出家によって新たに作品化するという試み。今回、演出家として腕を振るうのは、野田秀樹とゆかりの深い俳優であり、演出家でもあるマルチェロ・マーニ。彼は、サイモン・マクパーニーらとシアトル・コンプリシテを創立したメンバーでもあり、ピーター・ブルックやロバート・パウル・ジャラ、数々の世界的演出家と協働作業をしてきた経験豊かな人だ。また、野田作品『赤鬼』、英国版『THE BEE』にも出演し、パートナーであるキャサリン・ハンター共々、野田の重要なアーティストック・パートナーでもある。

すでに一昨年から、彼は、作者である野田秀樹はもちろん、プロデュースを手掛ける劇場スタッフらと共に構想を練り、東京でのワークショップを経て今回のキャストを決定した。今夏には再度、出演が決まった女優の穂谷友子、奥村佳恵と、さらには舞台美術や衣装デザイナー、スタッフ陣ともワークショップを行い、作品制作の準備は整いつつある。2014年1月には、再度マルチェロが来日し、最終リハーサルを経て、いよいよ2014年2月、東京芸術劇場シアターイーストにて、幻の野田作品が新たによみがえる。

演出家のマルチェロはこう語る。「今回は、ふたりの違う個性を有した女優さんと、似て非なるふたつの作品世界を紡いでいくつもりなんだ。ひとつの作品は、穂谷友子という、経験豊富で演技力も申し分のない女優と、そしてもう一つの作品は、若くてイノセントな魅力に溢れた奥村佳恵という女優とね。ひとつの脚本から、二卵性双生児のような、別々の

魅力をもった作品を生み出してみたい。うまくいかどうかはわからない挑戦だけどね…。(笑)」実際、夏に行われたワークショップでも、マルチェロと穂谷、そして奥村は、同じ脚本を読み込むということを出発点としながらも、対話とワークショップを重ねることで、それぞれの肉体・肉声から何が生まれるかを、ひたすら模索し続けていた。

「僕は、今回の物語を、ティンカーベルがホームレスとして生きているという設定にしようと考えている。ホームレスのティンカーベルが段ボール箱や新聞紙で家を作ろうとするが、誰かよその人によってその家は壊されてしまう。だから、彼女はまた、ものを集めてきて家を造り直さなきゃならない。彼女がつくるのは(彼女が愛した)ピーターバンの魂を祀る神社のようなものだ。そこで、ティンカーベルは行き交う人々に自分の物語を語りかけ、そして我々は知ることになる。ティンカーベルが、とても大切な何か、つまり深く愛した恋人を失ってしまったということをね。」マルチェロはこう続ける。「ここには、愛することと、それを失うことを経験した、痛々しい状態にある心の葛藤という普遍的なテーマがある。生きるべきか、死ぬべきか。人生に終止符を打つべきか、それともこのまま生き延び続けるべきか。」「相反したふたつの感情が葛藤し、いつもはそのマイナスな方が勝っている。けれど、ある日、突然、いつもは負けていたポジティブな方が優勝するんだ。」

野田秀樹が1981年正月の三が日に、一気に書き上げたという「障子の国のティンカーベル」は、多くの機知と魅力がちりばめられ

た戯曲だ。劇中には、主人公のティンカーベルはもちろんだが、それ以外にもピーター(パン)や曳子、国王や皇帝、死神や悪魔など、野田秀樹らしい多彩なキャラクターが登場し、歌も交えながら物語はめまぐるしく展開する。さらに、この戯曲には、タイトルからも推察できる通り、日本と西洋の繊細かつ複雑な関係も織り込まれている。マルチェロ曰く「たくさんのレイヤー(層)が折り重なり、仕掛けが施された野田さんらしい複雑で奇想に溢れた戯曲」を、たったひとりでのように演じきることか?女優である穂谷友子や奥村佳恵にとっても大きな挑戦であることは間違いない。

国際的に活躍する演出家、マルチェロ・マーニと、それぞれ違う個性を有するふたりの女優が、どのような化学反応を見せるのか?ひとと味もふた味も違うスパイスの効いた、新たな野田ワールドの誕生は如何に?しかと、その目で確かめてほしい。(敬称略)

取材・文:編集部

#### 障子の国のティンカーベル シアターイースト

作:野田秀樹  
演出:マルチェロ・マーニ

2月13日(木)～17日(月)  
出演:穂谷友子 ※17日(月)は追加公演  
2月20日(木)～23日(日)  
出演:奥村佳恵  
※ダブルキャストによる連続上演

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
※東京文化発信プロジェクト事業

詳細はP12へ

## おそろべき親たち

### 誰もが“伝説”と呼んだ、 衝撃の舞台が帰ってくる

息子を溺愛する母が、息子の恋人の出現に激しく嫉妬する。だが、その息子の恋人とは、父親の不倫相手でもあった。一家に嵐が忍び寄る……。2014年、衝撃のジャン・コクトー作品『おそろべき親たち』が、東京芸術劇場に復活!



伝説の舞台と呼ぼう。2010年、東京芸術劇場 シアターウエスト(当時の呼称は、シアターウエストではなく「小ホール2」だった)で上演されたコクトー劇『おそろべき親たち』。実力派揃いのキャストを30代の若き演出家が束ねただけでも特筆ものだが、容赦のないリアリズム追求で、家族の欺瞞と崩壊を生々しく現出させた手腕。

出演者のひとり、麻実れいは、本作などで、第18回(2011年)読売演劇大賞最優秀女優賞を受賞。演出家自身も毎日芸術賞千田是也賞に選ばれるという、各方面から高く評価を受ける結果となった。

その演出家、熊林弘高。覚えておいてほしい名前だ。2014年3月、ここシアターウエストに帰ってくる名作『おそろべき親たち』の衝撃的な舞台成果とともに。

2010年作品メンバーの再結集に誰もがこだわった今回。その際のキャスティング交渉時から、演出家とキャスト5人は、太い絆で結ばれていたのだろう。特に、最年少キャスト・満島真之介の登場は、キャスティングの最後のパズルのピースをドラマチックに埋めた。演出家は回想する。

「息子役のミシェルだけが稽古開始の段階でも未決定でした。ちょうどそのころ、あるワークショップに満島真之介さんがふらっと来ていて、インスピレーションが走った。さっそくオーディションしました」。母親役の麻実れいにも、最年少キャストの登場は鮮烈な印象を残したようだ。彼女は言う。「オーディションの会場に入ってきた彼は、まさに「まっしろけ」。白でなくて「まっしろけ」でした。透き通って、無垢で。母イヴォンヌ役のわたしとし

ては、ミシェルそのまんまの満島くんが入りやすかった」。熊林は続ける。「ミシェルは、閉じられた世界から飛び出していく。何も知らないピュアさと、外の世界を楽しみと思う感性和、飛び出して傷つくナイーブさ。そういう肉体を持った人が必要でした。決めたのは、理屈では説明できない、見た瞬間の何か」。

この戯曲の演出が「行ける」と思えた瞬間は、熊林いわく「ラストシーンのひらめき」。未見の方のために、ラストの詳細を述べることは控える。「モラルを超えた性愛のかたち」とだけ書いておく。過激にエロティックな着想である。演出家は続ける。「キャスト全員に、ラストはそのような描き方になると宣言して、みんなで話し合っただけです。翌日、そのシーンを演じる麻実さんと満島さんのふたりだけに来てもらい、麻実さんのアイデア通りに演じました。その稽古は10分で完了した。生々しいシーンでした」。アイデアを出した麻実の証言。「熊林さんのやりたいことはすべて受けようと思っていましたから、終始素直でしたよ(笑)。「え!?!」と思うような大胆なシーンもありましたけど。例えば別のシーンで、「ここはシックスナインで」と言われて、「何ですそれは? 知りません」ということもありましたが(笑)」。大胆なシーンに踏み込むのは、演出家自身の指針でもある。「ヨーロッパの巨匠演出家ペーター・シュタインが言った言葉「芝居におけるすべての関係性はエロスだ」は、座右の銘です。『おそろべき親たち』は、まさにこの言葉通りの作品です」。

2002年、熊林弘高は、ストリンドベリ作品『火あそび』で、演出家デビューを果たす。2010年の『おそろべき親たち』は、彼にとつ

て、わずか6作品目の演出キャリアだった。2014年3月、その『おそろべき親たち』が帰ってくる。麻実れいは言う。「3年の月日が流れて、例えば満島くんは、今でも健康的な青年ではあるけれど、時が彼を成長させています。前のままのミシェルじゃないということに彼自身が驚くはず。成長した彼やわたしたちを、しかも、同じ作品で表現したい。熊林さんの演出は、結構厳しくてつこい。でも、全員が、あの暖かさ、優しさ、繊細さに惚れているので、楽しい稽古場でした。演出助手の方が「そろそろ稽古を」って促すほど、毎日、時を忘れて雑談したり、日々充実。そういう風にリラックスしているのに、厳しいところは厳しい。そこが取り柄なんです。熊林さんの演出も、どう変化するか、楽しみ」。演出家も、覚悟は決まった。「2010年のときの資料映像も持っていませんし、台本に書き込みもありません。前回はなぞる気もない。同じスタッフ、同じキャストとともに、一からの気持ちでのぞみます」。

劇場で見届けてほしい、『おそろべき親たち』2014年バージョンを。伝説は、再び、伝説になる。

取材・構成:戸塚 成

#### おそろべき親たち

3月2日(日)～16日(日) シアターウエスト  
作:ジャン・コクトー  
翻訳・台本:木内宏昌  
演出:熊林弘高  
出演:佐藤オリエ  
中嶋朋子  
満島真之介  
中嶋しゅう  
麻実れい

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
助成:平成25年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業  
※東京文化発信プロジェクト事業  
原作:「LES PARENTS TERRIBLES」 by Jean COCTEAU  
ジャン・コクトー委員会会長 ビエール・ベルジェ氏提供  
著作権代理:(株)フランス著作権事務所

詳細はP13へ